

愛媛大学教育学部

第122号

# 同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番  
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp



# 百四十年の歴史



愛媛大学教育学部  
同窓会会長  
高橋 治郎

同窓会会員の皆様におかれましては、お元氣にご活躍のことと拝察いたします。常日頃から物心両面にわたり温かいご支援をいただき、同窓会の運営もスムーズにいつています。心よりお礼申し上げます。この三月には二百三十名の学部卒業生と四十六名の大学院修了生を同窓会正会員に迎えることができました。毎年、着実に会員数が増え、各地で活躍してくれています。頼もしい限りです。卒業生、修了生には同窓会から卒業・修了の記念品として「電波時計付きフォトスタンド」をプレゼントしました。「これからは時間管理が大切ですよ」と「大切な想い出を常に身近なところに」という二つの意味をこめて……。

時間管理といえは、日々のスケジュール、現役時代は秒とはいませんが分単位で追われる毎日でしたが退職後の今は「日時計」で生活しています。それでもノンビリしているようでも時間の流れは速く、一週間なんかは「あつ」という間ですし、一ヶ月も「おつ」という間です。つい先日二月十五日に植えたジャガイモは「あつ」という間に芽を出し、薄紫の花を咲かせています。また、四月はじめて蒔いた野菜やハーブも日増しに大きく成長しています。今日は、ズッキーニやパプリカなどの苗を「連れ」の指示どおりに植えました。これらが食卓に出てくるにはそう時間がかかりません。楽しみです。

「歳を取ると時がたつのを速く感じる」といいますが、確かにそのとおりです。地球の自転速度は遅くはなっていますが、速くなることはありませんので、加齢とともに体内時計のテンポが速くなっているのでしょうか。動作は遅くなってきましたが……。

さて、時間の話をしてみました。私が愛媛大学教育学部は、今(二〇一六)年、その前身校である愛媛県師範学校の設立(明治九

(一八七六)年八月)から数えて百四十年目を迎えます。「明治は遠くなりけり」といいます(いいました)が、師範学校の設立がつい先日のように思います。なにせ、私は「地質屋・やましくない山師」ですので「地球は四六億年前にできた」という時間概念でものを見ます?ので百年や二百年は……。ちなみに「南海地震」は九五年から一五〇年の再来周期で起きています。前回、昭和の南海地震は昭和二二(一九四六)年十二月に発生しています。まだ百年たっていません。

愛媛県師範学校が設立された明治九(一八七六)年は、まだまだ江戸時代の古きものを引きずっていた時代で、「廢刀令」が出されたり、香川県が愛媛県に合併されたり、……、愛媛新聞が創刊された年でもあります。全国的には「地租改正反対」の大規模な農民一揆が発生しています。また、愛媛県師範学校の設立と同じ時に札幌農学校も開校しています。前年の明治八(一八七五)年一月に秋山好古が三津浜港から代用教員になるべく大阪へ向かっています。その後はご承知のように代用教員から本教員、そして陸軍士官学校に入

山中学校)で教鞭をとり、この松山での経験をもとに明治三九(一九〇六)年に小説「坊っちゃん」を発表しています。この小説の中に「中学と師範とはどの県下でも犬と猿のように仲がわるいぞうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。」という一節があり喧嘩シーンも出てきます。私たちの先輩と松山中学校の生徒が石手川の土手?で喧嘩していた光景を思い浮かべると百数十年前の出来事が昨日のように思えてなりません。私たちの先輩、なかなかの猛者だったでしょう。なお、「坊っちゃん」が「ホトトギス」に発表された同じ年に、桜井忠温の「肉弾」が刊行されています。	菊池 祥裕
日本が近代国家へと発展してゆく時代、明治九(一八七六)年から国の根幹をなす教育を担う教員を養成してきた愛媛県師範学校、さらに愛媛県女子師範学校、官立愛媛師範学校、愛媛青年師範学校と脈々とした伝統を受け継ぎ、昭和二四(一九四九)年五月愛媛大学教育学部として発足し、今日に至っています。	菅田 頭
この伝統ある私たちの同窓会の懇親会が八月二〇日に開催されます。師範学校設立一四〇周年記念の会も兼ね、楽しい会にしたいと考えています。百四十年の歴史を築いてきた皆様のご参加をお待ちしています。今後とも同窓会の運営にご協力ください。	高橋 治郎
表紙 「魚市場初競り」……………	(1)
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫	
「百四十年の歴史」……………	
教育学部同窓会会長 高橋 治郎	
心 響……………	(2)
「今「豊かな感性の教育」を」	
「立入 哉 研究室」	
「わくわくチャレンジサタデー活動」	
久米……………	(5)
学内最近のニュース……………	(7)
・教育学部留学生歓迎会を開催しました	
・教育学部が今治市教育委員会と連携協力事業の調印を行いました	
・小中教職員研修拠点となる「松山市教育研修センター」の開所式がありました	
・韓国・世宗市立燕東中学校で生徒との交流会をしました	
職場だより……………	(9)
「子どもの笑顔の花」を咲かせたい	
松山市・附属小教諭 濱田 圭	
「結(ゆい)」の心で座敷雛	
八幡浜市・真穴小教諭 大野 純子	
「たくさんのスタートを越えて」	
四国中央市・土居中教諭 中村 将志	
表紙作品「魚市場初競り」について	(11)

# 今 「豊かな感性の教育」を

菅田 顕

(昭三四卒)

子どもにとって、「自分探しの旅」が学校生活にはあるという。その旅の途中で出会うであろう教師は、子ども達をどのように迎え、どのように育てなす、未来への旅立ちをさせていけばよいのだろうか。

坂村真民先生は、  
二度とない人生だから  
まず一番身近な者たちに  
できるだけのことをしよう  
まずしいけれど  
こころ豊かに接していこう

と書き綴っている。

この坂村先生の意と同じものを体している教師は、教育の場で出会う子ども達に、常に「二期一会」の心根で以て接し、慈愛溢れる眼差し、言動で以て、愛おしい思いで以て子ども達を育み育てている姿がある。

司馬遼太郎先生は、「二十世紀に生きる君たちへ」の珠玉の文章の中で、子ども達に、「しっかりと自分の確立してほしい。そのために自分にきび

しく、相手にはやさしくそして、他人のいたみを感じる事ができる。それらを訓練すること、自分が確立され、たのしい君たち」になつていくことができる。」

子ども達が、この司馬先生の思いに共感、共鳴し、今を懸命に生きようと志し、ずっしりとたくましい足どりで大地を確りと踏みしめつつ旅するために、また、楽し



心響

くて心ときめく旅をするために、教師自身も又、よき先達としての旅人でなければならぬ。そこには教師も「自に厳他に慈」でもって、自己確立を目指し懸命に今を生きようと日々精進努力する人間性豊かな感性の持ち主として歩んでいる姿に、子ども達は感銘し、共に生きよう、共に育とうとする風土が芽生えてくる。  
雪国の宿で、旅行く大人が旅行

く子どもにたずねた。  
「雪がとけるとなんになるか」と。

子どもは即座にこたえた。  
「春になる」と。

なんと、しなやかでおおらかな心をもつ子どもではないか。それは大人自身、己の感性を問われる。厳しい子どものこたえでもある。

その時、「はっ」と心に感じた大人は、厳しい冬を耐えて春を待つ子どもの心に感じ、雪解け水がキラキラと輝き、さらさらと春を告げるせせらぎとなつて流れゆく情景を描きながら、限らない自然の恵みと素晴らしさを語つたに違いない。

人生の先達としての教師には、「悲しみを秘めた強さのある優しさ」をもち、自分を常に厳しく見つめ、律し、「これでいいのだ」ではなく、「これでいいのか」と自分に問い直し、常に課題意識と鋭く研ぎ澄まされた五感をもち、子どもと同化する中で、「啐啄同時」の言動がとれなければならぬ。

旅行く子ども達がこのような豊かな感性とたくましい実践力をもつ教師に出会うとき、青春が弾み、息づき、ときめくにちがいない。

次の詩を、常に自己確立を目指し懸命に日々研鑽に励む若き教師の方に贈りたい。

## 「私が先生になったとき」

私が先生になったとき  
自分が真理から目をそむけて  
子どもたちに本当のことが語れるか

私が先生になったとき  
自分が未来から目をそむけて  
子どもたちに明日のことを語れるか

私が先生になったとき  
自分が理想をもたないで  
子どもたちに胸を張れと言え  
るか

私が先生になったとき  
自分がスクラムの外にいて  
子ども達に仲良くしろと言え  
るか

私が先生になったとき  
一人手を汚さずに自分の腕を  
組んで  
子どもたちにかんげいと言え  
るか

私が先生になったとき  
自分の戦いから目をそむけて  
子どもたちに勇気を出せと言  
えるか

「人に恵まれた教員生活」  
大洲市・大洲南中教諭：市橋 明子  
先輩を偲ぶ……………(13)

林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十三)  
村上節太郎先生を偲ぶ  
文芸……………(15)

川柳「子を叱る」……………丹下 友和  
絵手紙「自然の移りかわり」……………宮内 久司  
俳句「春夏秋冬」……………平野 範里  
短歌「荒地に花を」……………平井 直子  
会員の声……………(17)

「師範学校から教育学部へ」……………峯本 高義  
「転依」……………吉原 宏文  
教育支援リスト……………(21)

同期会……………(22)  
昭和三十三年卒業生同期会  
学部トピックス……………(23)  
久枝幼稚園で父の日プレゼント製作  
「藍の絞り染め」を行いました  
・教育学部で読売新聞大阪本社による  
出前授業を実施しました

同窓会支部長会報告……………(25)  
叙勲・受賞……………(18)  
寄付者・会報送料送金者名……………(28)

敬 甲……………(28)  
原稿募集……………(23)  
放送大学後期入学生募集……………(21)  
愛媛大学と山形大学で「第六回  
卒業・修了合同美術展覧会」を  
開催しました……………(29)

# 学部 の 今



## 研究室 紹介

### 特別支援教育講座

### 立入 哉 研究室



#### 私と教育学部

私は昭和六十年に愛媛大学教育学部聾学校教員養成課程を卒業です。ですので、教育学部生だった四年間と、平成九年に助教として愛媛大に赴任してからの年数を合わせると二十三年間、文京町キャンパスで様々な方々からのご指導を受け、今に至っております。このようなご縁もあり、平成二十四年から同窓会の副会長を務めさせていただいておりますが、

諸先輩方のお役に立つようなことなどできず、いつもお願いばかりさせていただいております。

学生時代、私が四回生の時に愛媛大に赴任なさった高橋信雄先生のご指導を受け、今は亡き、井原栄二先生のお世話で徳島県立聾学校で働くことができました。その後、吉野公喜先生（高知県立大学元学長）のお声掛けがあり、七年間の現職経験にて聾学校を退職し、筑波大学心身障害学系にて修士、博士後期で学ぶ場を得ました。博士後期は大沼直紀先生（筑波技術大学元学長）のご指導を仰ぐことになり、同時に昭和大学医学部耳鼻咽喉科教室（岡本途也教授）に通っております。博士後期を中退し、研究協力課の事務職員として、再び職を得て、先生方や学生さんのお話をさせていただ

だきました。その後、井原先生の後任として採用していただき、今に至っております。

その後、名称は変わりつつ現在まで至って来ましたが、今年度、コースとして明確に分離した教育ができなくなってしまうことは本当に残念に思っています。

この四月からの新学部発足に伴い、今までは特別支援教育教員養成課程が聴覚言語障害コースと発達障害コースに分かれていたものが、コースに分かれることなく養成を行うことになりました。そもそも昭和二十七年に「聾教育課程」として発足し、聾学校教員養成課程、さらに聴覚言語障害コースと、六十四年に渡り、学部卒業生約七二〇名、言語障害教員養成特別専攻科の卒業生約二八〇名の同窓生を送り出してきました。

聴覚言語障害教育の特徴と独自性  
聴覚障害児の教育・支援は、まず対象児の保有聴力を測定・評価することから始まります。四号館の三階には簡易な防音室があり、近年、生後直後に聴覚障害の有無がわかるようになり、〇歳児からの聴力測定と評価が聾学校の現場で必要となつていくことから、乳幼児の聴力測定法も実機を使用し学習できる機会を学生に提供しています。聴覚障害がわかれば、次に補聴を通してコトバを教えていく言語指導法や、さらに手話を用いたコミュニケーション指導が重要ですが、こうした指導法もカリキュラムに位置づけています。

近年では大学や大学院で学ぶ聴覚障害者も増加の一途で、学内の聴覚障害者学生への支援も学内のバリアフリー推進室と協力して行っています。

#### 補聴器研究三十余年

補聴器は、聴覚障害の程度や補聴のニーズにより、器種の選択、次に補聴器内部の調整を行う必要があります。最近の補聴器はコンピュータ化されており、聞こえの状態に合わせて細かい調整をすることが可能です。成人であれば、自分の補聴器の聞こえの状態をコトバで伝えることができます。しかし、赤ちゃんではどうでしょうか。赤ちゃんは自ら「聞こえる」と言うことすら難しいですから、音響物理的に補聴器の周波数特性を決定する方法と、赤ちゃん自身の聴性反応（聞こえたことによる反応）の観察を組み合わせた多角的な評価によって、補聴器の調整

聾課程は、国策として全国十の大学に設置され、四国には愛媛大学のみに設置が認可されました。

臨床実習の場として、就学相談・教育相談や、補聴器や教室音響に関する補聴相談を受け付けており、これらの機会に学生を参加させることで、即戦力となる教員の養成を行っています。

また、附属病院耳鼻咽喉科の羽藤直人先生のご指導の下、医学部での補聴器外来を実施するといった医療との連携や、愛媛県視聴覚福祉センター、松山市手話相談室





を進めていきます。例えば、音が外耳道に入り、鼓膜までの距離の間にどのように変化するかを物理的に測定して、周波数特性に反映させるとか、VRAという赤ちゃんの音への気付きを測定する手法を組み合わせて、補聴器内部のソフトウェアに反映させていきます。私の最も好きな研究は、乳幼児の補聴器調整(フィッティング)です。聾学校の現場では、ニーズが高い分野なのですが、研究として取り組んでいる大学教員は全国で数人しかおらず、まさにニッチな研究分野です。

昨年、片側は聞こえるが、もう片側はまったく聞こえないという一側性難聴者向けの新たな補聴器

を作り、「EHEIME」と名付けました。現在、特許申請中で、今年度は、中核となる部品を製造する企業を探さなければなりません。思っています。

**国は違うが教育は一緒**

筑波大で学生だった頃、スリランカの聾学校で補聴器を学びたいというニーズがあることを知り、現地で活躍していた青年海外協力隊の隊員の招きで、スリランカに数度行く機会がありました。また、前述の大沼元学長と共にタイのマヒドール大学にて講義を担当することもありました。さらに、パレスチナに日本のNGOが聾学校を設立したので、指導に行つて欲しいという依頼があり、三週間ほどガザに滞在し、現地の教員と共に聾教育に没頭できました。所や文化、宗教は違つていても、聞こえない子どもは存在し、聞こえない子どもへの教育は世界共通だと心から思う事ができました。

その頃、イスラエルの補聴器メーカー、AVR社が世界で初めてFM電波を受信できる耳かけ型補聴器を作りました。その補聴器を日本でも使用できるようにならないかと輸入代理店探しに苦労しました。パレスチナからの帰路、イスラエルに立ち寄り、ナザレでAVR社のBarak社長と日本での

販売開始を祝いました。

そのBarak社長から日本で国際会議を開こうという提案があり、十年間ほど開催事務局を担当することにになりました。この会議に招聘したアメリカのDr.Cherryと意気投合し、二〇〇五年に彼女を頼つて十ヶ月間、コロラド大学ボルダー校に留学する機会を得ることができました。

留学を終え、このような思いをぜひとも学生さんにも感じて欲しいと思つていたところ、韓国の順天郷大学から留学プログラムのご提案をいただき、学部間学術交流協定の締結ができました。今期は、愛大生四名が留学中で、また順天郷大学から三名の留学生を引き受けています。私自身の経験から、最低でも四カ月ぐらいでなければ留学の成果は出ないと思つていたのですが、こうした長期のプログラムに派遣、受け入れ共に多くの学生が挑戦してくれることを本当にうれしく思っています。

同窓会からは、教育学部に国際交流基金として、毎年二十五万円を頂戴しております。こうした基金により、多くの愛大生の派遣と、留学生の受け入れができています。特に深くお礼申し上げます。特に受け入れ留学生が、学部学生の周囲にいて、学部学生にとつ

ては大きな刺激になっていると実感できることがあります。ぜひ、これからも継続的な支援をお願いしたいと思つております。

**遊ぶこと**

最近の学生さんを見てみると、できるだけ多くの免許を取ろうと本当に一生懸命に勉強している様子がわかります。しかし、私は「より良い教員になるためには、勉強より遊ぶことが大切だ」と思っていますし、機会があれば、そう話しています。楽しく遊ぶ、思いっきり遊ぶ、深く遊ぶことで、実は、新しい人脈を得ることができ、自然の道理を知ることができ、心が解放されることで人と優しく触れ合えるようになると思つています。教員にとつて、夏休みなどの期間は本当はそうした新たな吸収のための時間だと思つのですが、近年、現場の先生方にそうしたチャンスが少なくなつてきているように思い、心配です。どういったことでも良いので、学生時代に趣味や好きなことを見つけておけば、それが遊びに発展していくとも思います。特に教育学部の学生さんは勉強熱心というイメージが強いですが、課外活動等を通して、自分の遊びの幅を拡げることが、教員にとつて大切なことと思つています。



# わくわくチャレンジサタデー活動

## 子どもたちと学び合う学生の活動報告

久米公民館

わくわくチャレンジサタデー

愛媛大学教育学部四回生

田窪 輝・木下 花菜

私達は三回生のときから愛媛大学フレンドシップ事業の「久米わくわくチャレンジサタデー」に参加しています。今年度の活動方針は、「わくわくする活動をつくり、参加する人全員が楽しくチャレンジできるような場にした」です。そして、このわくわくチャレを通して、「伝えあい」「助け合い」「学び合い」の三つを、育てたい子ども像としていきます。わくわくするような活動を展開して、子どもたちが楽しくチャレンジしていくことができるようなわくチャレをつくりあげていきます。そのために、子どもたちだけでなく、私たち大学生も「伝えあい」「助け合い」「学び合い」をしながら、授業や遊びを計画し、実践、反省することで、お互いに高め合って活動していきます。

わくチャレは、毎月一回程度、土曜日の九時から十二時までで行っ

ています。教室や体育館、運動場、公園、さつまいも畑など、さまざまな場所で活動しています。一年間同じ子どもたちと活動していくため、子どもとのつながりを築いたり、成長を感じたりすることができ、活動を行う喜びでもあります。

活動の一日の流れ

- ・ 「始まるの会」
- ・ 「わくわくゲーム」
- ・ 「授業」
- ・ 「全体遊び」
- ・ 「感想シート」
- ・ 「終わりの会」

「始まるの会」では、あいさつや健康チェックを行います。今年度から新しい取り組みとして、今月の歌を歌う時間をつくりまし



た。朝一番の活動を始める前に、歌声を響き合わせることで、「今日も一日活動するぞ」「わくチャレ楽しむぞ」という気持ちに子どもも大学生もなることができます。思い行うことにしました。

「わくわくゲーム」では、人間関係づくりをテーマとして、教室内で遊びを行います。昨年度は、「絵しりとり」や「仲間を探せゲーム」といった遊びを行いました。仲間を探せゲームでは、「ジェスチャーだけで仲間を見つけた」とは難しかったけれど、みんなとの距離が縮まった」という子どもからの感想がありました。わくわくゲームは生活班ごとで協力した

り、話し合ったりしてチームワークの試される活動になるため、子ども同士でのコミュニケーションの場になっています。また、大学生も遊びに参加したり、遊びの進行役になったりして、子どもと大学生のコミュニケーションの場でもあります。

「授業」では、授業者が中心となつて授業を考え、さまざまな教科の授業を実践します。子どもがわくわくして、チャレンジできる

授業になるような教材、授業構成を目指しています。昨年度は、真空装置を使った「音が伝わる仕組みを知ろう」という理科の授業や大学生がバイオリンを演奏して「交響曲ってなんだろう?」という音楽の授業をしました。大学生の間に授業を行える場合は、附属小学校での教育実習を除けばほとんどなく、この授業実践の場が私たち大学生にとって、貴重な場になっています。また、授業者が中



心となって、大学生全員で授業を  
考えていくことで、さまざまな視  
点の意見を聞くことができ、計画  
や反省が充実したものになってい  
ます。

「全体遊び」では、子どもたち  
が思いっきり体を動かす活動の中  
で、運動の楽しさに気付き、子ど  
も同士の絆を深めることを目的と  
して体育館や公園を利用して行っ  
ています。時には学生も加わり、  
活気あふれる時間です。

これまでに、「ねずみねこゲー  
ム」や「逃走中」、「ドッチビー」  
などの活動をしました。四十五人  
という大人数で遊ぶ機会なかなか  
ないものです。子どもたちも大盛  
り上がりで白熱しています。活動  
内容は、子どもたちの年齢などを  
考え、毎回学生が創意工夫を凝ら  
して考案し、全体の話し合いの場  
で、さらに良いものになるよう改  
善を重ねています。安全などに気



をつけ、実際の活動の際にも学生  
全員で協力して取り組めます。

季節に合わせて「行事」も盛り  
込んでいます。昨年は、春にさつ  
まいもの苗植え、夏には夏休み特  
別企画のうちわづくり、秋には、  
さつまいもの収穫と焼き芋作り、  
冬にはクリスマスリースづくりな  
ど、イベント盛りだくさんでした。  
最後の月には、卒業制作として、  
子どもと学生の似顔絵を入れたさ  
つまいも畑の看板を作りました。  
卒業文集の製作も行い、一年を通  
じた活動をいつでも振り返ること  
ができます。学校の授業では経験  
できないようなことを企画できる  
のもわくチャレの魅力です。また、  
さつまいも畑は、地域の方が管理  
されており、苗植えの際の指導を  
いただいたりするなど、地域の方  
々との交流も深めています。う  
ちわづくりやクリスマスリースで

は、子どもたち一人ひとりの感性  
が表現され、こちらも驚くような  
オリジナリティあふれる作品が出  
来上がります。子どもたちが工夫  
を凝らして、夢中になって作品を  
仕上げていく様子を見てみると、  
こちらにも楽しくなります。

先日の五月十日（火）には、久  
米小学校を訪問し、昼休みに三百  
名ほどの子どもたちの前でわく  
チャレの活動を紹介しました。活  
動の具体的な流れや様子につい  
て、写真などを用いてプレゼン  
テーションで紹介することで、子  
どもたちにも興味をもってもらう  
ことができました。わくチャレを  
通して、新しいことにチャレンジ  
したい！と思ってくれる子ども  
たちのたくさん参加に胸を高鳴らせ  
ています。そして、その子どもたち  
の期待に応えられるよう、さらに  
パワーアップしたわくチャレは、  
学生同士で切磋琢磨し、よりよい  
活動と思いつく作っていきたく  
思います。



## 教育学部留学生歓迎会を開催しました【4月25日(月)】

平成28年4月25日(月)、校友会館2階「サロン」で、教育学部留学生歓迎会(前学期)を開催しました。本学部留学生は、今年度4月から新たに6人の留学生を迎え、現在12人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チュータ、事務職員などが一同に集いました。

国際交流委員会委員長の立入哉教授の司会のもと、佐野栄教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で閉会となりました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生活が有意義なものになるよう願っています。



学内最近のニュース

## 教育学部が今治市教育委員会と 連携協力事業の調印を行いました【4月28日(木)】

平成28年4月28日(木)、教育学部が今治市教育委員会の高橋実樹教育長を迎え、同委員会との平成28年度連携協力事業の調印を行いました。

教育学部はこれまで、愛媛県教育委員会、松山市教育委員会、今治市教育委員会、伊予市教育委員会、松前町教育委員会、東温市教育委員会、愛南町教育委員会とそれぞれ連携協力の覚書を交わし、その活動を通して、教育研究、教員研修、教員養成について多くの成果を挙げてきました。

今治市教育委員会とは、平成15年の覚書の調印以来、継続的に共同研究を行っており、『研究報告書』(愛媛大学教育学部・今治市教育研究所)の形でその成果をまとめています。今年度は、昨年度に引き続き、「確かな学びを保障するカリキュラムの開発と授業の創造」というテーマで研究を推進することとしました。その趣旨は、「教育現場の諸問題の解決のために、理論と実践の一体化による研究を推進するとともに、教師の創意工夫を生かした授業を創造し、児童生徒に多様で確かな学力を身につけさせる」というものです。教育現場の具体的に即した継続的な研究の成果が期待されます。



握手を交わす佐野栄教育学部長と今治市教育委員会高橋教育長

# 小中教職員研修拠点となる「松山市教育研修センター」の開所式がありました【4月4日(月)】

平成28年4月4日(月)、東雲小学校に併設された「松山市教育研修センター」の開所式があり、大橋裕一学長、三浦和尚副学長他の本学関係者が来賓として出席し、野志克仁松山市長らとテープカットを行いました。センターは、松山の子どもたちに、これからの社会を生き抜く力と郷土への愛情と誇りを育む、より質の高い教育を行うため、学校教育についての調査研究や教職員研修の拠点として開設した、新たな教育施設です。

教育学部と松山市教育委員会は、平成14年5月に連携協力の覚書を締結しており、今年3月には連携をさらに強化するために覚書を取り交わし、センター内に「大学連携室」を設置しました。日常的に情報交換しながら教職員研修の見直しや講師派遣などの支援を行うことにより、連携協力の可能性を広げることや教員養成に大きなメリットがあると期待されます。



新設された松山市教育研修センター



開所式でのテープカット

# 韓国・世宗市立燕東中学校で生徒との交流会をしました

愛媛大から順天郷大学に留学している学生さんたちが、現地の中学校で交流の機会を持ちました。その様子が現地の新聞で紹介されました。

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——

## 世宗市立燕東中学校の民間外交使節団です 2016.05.12

「2016年インターナショナル・デイ」の推進

世宗市立燕東中学校の中学生が11日、韓日文化交流の一環として、日本の愛媛大学の学生に会いました。燕東中では、グローバル時代に合わせて、国際的な考え方と見解を広げるために、日韓の文化交流を企画して「2016年インターナショナル・デイ」を推進しました。

この日は、日本の愛媛大学で特別支援教育、英語教育、国語教育を専攻している大学生4人の燕東中の生徒42人が学校の教科や日本の文化紹介といった共同の活動を通して、国際的な感覚と学習能力を強化するための時間を持つことができました。

ジョンフェテク校長は「今回の韓日文化交流は、私たちの生徒が国際的な感覚を備えたグローバルリーダーに成長していくための最初のボタンです」とその意義について話し、「今後、韓日文化交流など、他の文化圏と接触する機会を継続的に実施したい」との計画を明らかにしました。



# 職場だより



## 「子どもの笑顔の花」を

### 咲かせたい



松山市  
附属小教諭  
濱田 圭  
(平二卒)

「花よりも花を咲かせる土になる」

これは、私の大好きな言葉です。学校では、子どもたちが主役です。スマップの『世界に一つだけの花』の歌詞にあるように、子どもたちは一人一人違う種を持っています。その子どもたちの笑顔の花を咲かせることに一生懸命になれる教員になりたいと思っています。『子どもの笑顔』という花を満開にするために、大雨や暴風などどんな状況においても、きれいな一つの花を咲かせる『土』になりたいと思います。愛情いっぱい肥料を与え続ける教員になることが私の目標です。」

これは、私が初任者の時に「初任者の声」に載せた文章の一部です。今回、このコラムを書くに当たり、自分が今まで書いた文章を読み返しました。その中で、初任者の頃の自分と再び出会いました。今もまだまだ未熟ですが、さらに輪をかけて未熟だった七年前……。この七年間で、あの頃よりだいぶ成長したと思う反面、子どもに対するキラキラと輝く笑顔、燃えたぎる熱い情熱は少し落ち着いてしまっているという自覚があります。うーん。もつと熱くならないといけないかと反省しています。

そんなことを考えながら採用試験の勉強に励んでいました。果たして、今もあの頃の熱い思いはもっているのだろうか……。採用されてからは、想像以上の日々の忙しさを理由に、一人一人の子どもの本心に正面から向き合えていないような気がします。

そして、大学三年生の教育実習。自分の力の無さを痛感しました。しかし子ども達と交わした「必ず本物の先生になって戻ってくるから」という約束と涙を流したお別れ会は今でも鮮明に覚えています。教育実習以降、小学校の先生を目指す気持ちは揺るぎのないものになりました。「もう一度あの笑顔を見たい」「子どもの成長に携わりたい」「子どもに夢を語ってあげたい」。

そんなことを思い出しながら、今の自分を振り返ると、専門である体育科の学習でさえ、恩師の教えを伝えきれているのだろうか。子どもの笑顔の花を咲かせることに情熱の全てをぶつけられているのだろうか。子ども一人一人違う、個性という美しい花を満開にしてあげることができているのだろうか。また、附属教員という立場上、教育実習生の指導もあります。私自信が実習を通して「絶対に先生になる！」と思わせて頂きました。



☎ 790-0855

松山市持田町一丁目  
五二二二

「結(ゆい)」の心で座敷雛

八幡浜市

真穴小教諭

大野 純子

(平一三卒)

今年度私は育児休暇をいただき、日々わが子との時間を大切に過ごしています。縁あって勤務校区内の人と結婚し、住み、出産し、子どもたちや保護者、地域の方々の温かさに包まれて生活しています。

私が住む八幡浜市真穴(真網代・穴井)地区では、長女が誕生すると初節句に「座敷雛」をします。座敷雛とは、家の座敷や倉庫の一角に盆栽や苔などで装飾した庭園を作り、そこに雛人形を配置して鑑賞し、祝う行事です。「女の子が生まれて座敷雛だ!」というみんなの願いが叶い、初節句となる今年四月二日と三日の二日間座敷雛を開催しました。

座敷雛の起源は、江戸時代に流行した長寿講伊勢踊りであるといわれています。その協踊りとして穴井歌舞伎が派生し、歌舞伎の技術集団が演出法を従来の雛祭りに

取り入れたことで座敷雛が誕生したと推測されています。現在のよな様式になったのは、江戸時代末期頃だそうです。ただし、「座敷雛」という呼び方はマスコミによつて付けられたもので、地元では「ひなさま」や「雛様建」と呼ぶ人もいます。平成十四年には、八幡浜市無形民俗文化財に指定されました。

このような伝統を継承するため、我が家でも娘の誕生後は座敷雛の準備に向けて動き出しました。

まずは、「棟梁」へのあいさつと依頼。棟梁とは座敷雛の采配を行う人です。経験豊富な穴井地区の方に引き受けてもらいました。

四月の開催までまだ時間がある初秋、さっそく棟梁ご夫婦から桜の花作りを教わりました。日本の春を象徴する桜。座敷雛の飾りにも欠かせないもので、幹は本物を調達し、花はすべて手作りです。桜の花は、薄ピンク色のティッシュペーパー一枚を十六等分し、それを切つて作ります。それに細かい針金を通して一つ完成です。これを「五千個は作つてほしい」と棟梁から指示を受け、気の遠くなる作業ですが、手芸好きな実家の母親や、その趣味仲間の方々の協

力で作っていききました。

真穴地区は、みかんの栽培が盛んで、秋から年末にかけては収穫で大忙しです。それが終わった年明けから、座敷雛準備に向け気忙しくなっていました。実際に建てる作業に取り掛かる前に、みかん農家である義父(娘の祖父)が主となり棟梁との打ち合わせや材料の調達などを行つていききました。

そして三月末、近所や親戚など数十人がボランティアで集まり、作業を開始しました。場所は、親戚の空き家の座敷で二十帖程あり、庭には樹齢二五〇年にもなる松の木があり、座敷雛を建てるには好条件です。作業は、雛人形を飾る内部とそれを鑑賞する周辺部(庭部分)に分かれて行われました。まずは周辺部。座敷内の人形や小道具、植物などに風雨や日光などが当たらないように、竹や板などを使って屋根や囲いが作られました。普段はみかん作りに励んでいる近所の方々が、ここでは皆大工となり、熱心に作業が進められました。

あつと言う間に鑑賞場所ができ、そこには見る人への配慮が施されました。それは、囲いの内壁には板を張り付けてありますが、

それだけでなく、下から三分の二程は和紙が貼つてあります。理由は、見る人の服や持ち物が壁に触れた際に板の塗料が付かないためです。また、所要所に竹の手すりや付けられ、そのすべてがつるに磨き上げられ、触つて怪我をしないように仕上げられました。

そして、メインの内部。ここは棟梁がすべて指示しながら四、五人の補佐役が盆栽や苔、稲、鉢植えの花、小石、桜の木などを配置していききました。その動きや感性は庭師のようでしたが、皆普段は農業を営む人によるものでした。

使用した植物の鉢は約八十鉢で、一つ一つ絶妙な角度や種類、色合いなどを考慮して置かれ、テーマの「水ぬるむ頃」を感じさせる春の里や野山の風景を作りました。最後にその一角に、人形や小道具が置かれ、そこはまるで雛人形が見える楽しんでいるかのよう、豪華絢爛に仕上がりました。そして、四月二日、当日の朝に鯛や伊勢エビ、サザエなどのお供え物を置いて座敷雛が完成し、近所の人や観光客などを迎える準備が整いました。この日は天候に恵まれ、九時の開始前から続々と観光客が来られました。県内はもち

ろん、県外や遠くは関東の方からも来ていただきました。娘が起きているときは、入り口付近でお迎えしていると、多くの人から「おめでとう」と初節句のお祝いの言葉をいただきました。二日目の午後には、中村県知事が来られて座敷雛を見た後、娘と一緒に写真も撮らせていただきました。

座敷雛を建てるに当たつて大勢に協力してもらいました。一週間かからない日数でこれだけのことができたのは、この真穴地区に「結の心」が強くあるためです。地域みんなで作り上げていただいた座敷雛。感謝の気持ちは、伝統の継承とともに将来娘に伝えたいと思います。

☎ 796-8053 八幡浜市真網代戊

一六二



# たくさんの スタートを越えて



土居中教諭  
四国中央市  
中村 将志  
(平二二卒)

小学校二年生の冬。「雪合戦するぞ〜」担任の先生の一声で一斉に教室から運動場へ走りだす子どもたち。私もその中の一人でした。それまで「将来の夢は？」と聞かれれば「サッカー選手です！」と即答していた私ですが、この日を境に将来の夢が少しずつ変わりはじめました。「学校って楽しいな。こんな場所で働きたい。」そんな単純な気持ちからですが、私の教師への道、第一のスタートとなりました。

時は流れ、私は大学生になりました。もちろん大学でも将来の夢は変わっておらず、教育学部に入りました。大学ではたくさんの仲間たちとたくさんの先生方と勉強しました。教科の授業や一般教養の授業、教職教養の授業を受講し、今まで描いてきた夢がより現実に近い感じました。そんな環境で生活し、教師への思いは募るばかりでした。そして楽しみにして迎えた四回生の教

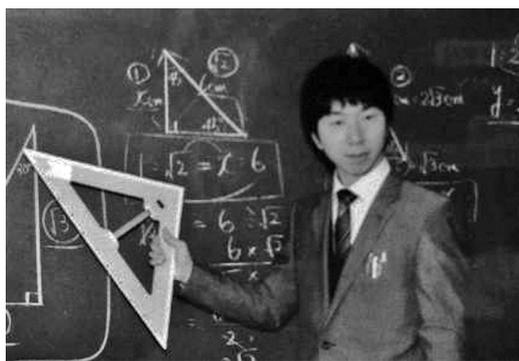
育実習。幸せなことに、母校で実習をさせていただくことになりました。初日、「声をかけてください。」という自己紹介が嫌だったので、「どんな声かけをするのでよろしく願います。」と自己紹介を済ませ、いよいよスタートです。教育実習は、朝早くに学校へ行き、職員室の掃除や校外の清掃から始まります。規則的な生活を送っていなかった私にとって、楽なものではありませんでしたが、毎日充実した日々を送っていました。授業で生徒とともに学習したり、昼休みの時間に体育館でバスケットをしたり、放課後に部活動と一緒に汗を流したり、そのすべてが新鮮で、わくわくさせてくれました。生徒たちは実習生である私を、客人を迎えるように丁寧に、そして気持ちよく受け入れてくれました。

実習も折り返し地点にさしかかろうとしたとき、ある出来事が起きました。担任の先生が服装のことで生徒を指導していたのです。話を聞いてみると、その場ではうまく話がまとまらなかったようなのです。放課後、その生徒と話す機会があったので、少し服装の話も聞いてみようと思いました。しばらく話していると、その生徒は服装を整えて下校していきました。「話を聞いてみてよかったです。」

と思うと同時に、大きな疑問が湧き上がってきました。もし、この学校の教師として、または担任として話をしていたら同じような結果になっていただろうか。今の自分は生徒から教師として見られているのだろうか。近所のお兄ちゃんが注意すればある程度の話は聞くものです。しかし、それはその場限りのものでその生徒の内面の変容につながるものではありません。そう考えると、初日に感じた「客人を迎えるように」という表現はまさに的を射っていたのです。もちろんそれは温かく迎え入れてくれた生徒たちに問題があったわけではありません。私の気持ちや、教師として必死になって働く学校という土俵に上がっていきなかつたということなのだと思います。

今のままの構えで実際にこの現場で働くことができるのだろうか。今まで教師という職業に憧れを抱き続けてきた私ですが、このことをきっかけに「夢の教師」を「現実の教師」として捉えるようになりました。医者、政治家、弁護士など、「先生」と呼ばれる職業はたくさんあります。しかし、自らは「先生」と呼ぶ職業は教師だけです。自らを「先生」と呼ぶだけの決意と覚悟があつてこそ初めて「客人」から「教師」になれるのだと痛感しました。これが私

の教師への道、第二のスタートです。そして今、私は四国中央市立土居中学校で勤務させていただいています。学校では次から次へと新しいチャレンジが始まります。生徒も日々変容しています。そんな中、周囲のたくさんの方々に支えられ、私はたくさんのスタートを切らせていただいています。今はスタートだからどこにゴールがあるのかも分かりませんが、一つのスタートを大切に、自分に納得のいくゴールを目指して頑張ります。



799-0432

四国中央市豊岡町  
大町一三三三

## 表紙作品について

### 「魚市場初競り」 二〇一五年



作者  
菊池 祥裕  
(昭四六卒)

魚市場テヤテヤビーや描き時。「魚買つテヤ」「これでビーや」競り師の声が響く。働く人の真剣味、生きる喜びが伝わってくる。活況の魚市場の二階見学通路からの観察・スケッチ・カメラ取材が中心である。

妻も娘も画人である。三人のアトリエにて一〇〇号大作に取りかかる。常々画面構成を思案しているので、下描きなしで一気に描き始める。三か月の制作期間が私のリズムに合っている。画面を三十分見詰めて十分描き、また写真資料観察等は再々である。

本作品は、日展四回目入選の作品である。鯛・あじは常連さん。人数は初回の一名から六名に減らしている。「感動は表現できたか」が命題である。

第二の人生九年間、絵ごころを取りもどすべくエネルギーを注ぐことができた。さらに精進したい。

#### 略歴

- 一九四九年 八幡浜市生まれ
- 一九六七年 愛媛大学入学
- 一九七一年 伊方町立伊方中勤務
- 一九七五年 県美術会会員
- 二〇〇七年 八幡浜市立保内中退職
- 二〇一〇年 本同窓会南予理事(四年間)
- 二〇一五年 光風会会友

796-8007 八幡浜市八代四五六一二七

# 人に恵まれた教員生活



大洲市  
大洲南中教諭  
市橋 明子  
(平一七卒)

大学を卒業してから今日まで、長い長い講師の期間を入れると、今年で教員生活十一年目に入りました。この十一年、私は人に恵まれていたと思います。同僚の先生、児童生徒、保護者などいろいろな人に出会うことができました。その人たちから多くの助けを受け、多くのことを学びました。

例えば、大学を卒業してすぐに講師として勤務させていただいた小学校では、同じような状況の人がいました。その人も大学を卒業してすぐに講師として働き出したので、私と同じようなことで悩んでいたりとつまずいていたりしていましたが、お互いよいアドバイスをもらいました。お互いよかったです。放課後はどちらかの教室で的外れな相談をしたり、休みの日はどこかに遊びに行ったりしました。また、その人

は実家で暮らしていたので、一人暮らしの私は、よくその人の家に行って、ご飯をご馳走になり、その人のお父さんとお母さんともいろいろ楽しく話もさせてもらいました。適切なアドバイスをしていただく先生は、もちろんありがたいのですが、このように、くだらないことでも一緒に悩んで話し合える人がいたことは、私にとってもありがたいことでした。そして、今では生活する場所が離れてしまいましたが、年に一回は連絡を取り合ったり、会って話をしたりしています。始まりは同僚でしたが、今では一生付き合っていきたい友達になりました。

また、その当時の校長先生にも大変お世話になりました。半年間だけではありましたが、仕事上の指導、そして私自身の体調や生活のことなども気遣っていただきました。夕食を私の家まで持って来ていただいたり、私の学校での様子を見て、週案に励ましの言葉やアドバイスを書いていただいたりしました。特に週案に書いていただいた言葉は、今でも折りに触れ読み返しています。『ならぬこと

はならぬ』という厳しさ、そして同時に優しさをもって、お互い子ども達に接していきたいですね」という言葉は、十年経った今でもふとしたことで思い浮かんでくる言葉です。厳しい中にも優しさを忘れてはいけないこと、そして校長になっても教諭と同じ立場に降りてきて考えてくださるという、この校長先生の人柄が、人には大切だと素直に感じさせてくれました。この言葉は、書いていただいた当時も自分自身の励みになりましたが、今読み返しても励みになり、戒めになり、非常に参考になるものです。教員として大切なことを再確認できたり、問題解決の糸口になったりします。そして、社会人一年目の自分を思い出し、懐かしくも感じさせてくれます。これからも、この週案を当時の校長先生の顔を思い浮かべながら読み返していきたいと思えます。

そして、講師を始めて四年目、「子どもたちに自分の気持ちを素直に伝えたい」という言葉を、当時の教頭先生からかけていただきました。ちょうど部活指導が上手いはず、落ち込んでいるときでした。職員室では教頭先生の目の前に私の机があり、そこでたまたま世間話をしてたときだったと思います。その中で、そのような言葉をかけていただきました。どのような話の流れでそのようなことを言ってもらったかは忘れてしまいました。その言葉を聞いた瞬間、気持ちが楽になったのを覚えています。この言葉は、それまでにも他の先生方から聞いて、その通りだと自分でも思っていました。しかし、このときはそれまでとは違って、言ってもらった言葉が腑に落ちる感覚と、目から鱗が剥がれ落ちたような感覚がありました。タイミングもあつたのかもしれません。当時の教頭先生の人柄がそうさせたのだと思います。子どもたちから恐れられてはいましたが、情に厚く、自分から進んで子どもたちの中に入っていく先生でした。そのような先生だったので、危なっかしいと思ながらも、私のことを気に留めていただき、そのときの私に合った言葉をかけていただいたのだと思います。

他にも、「これぞ教師のプロだ」という姿勢やしんどいことも楽しさに変えて乗り越える姿勢などを間近で見させていただいたり、「先生の思うようにやって欲しい」などと言葉をかけていただき、協力していただく多くの保護者の方に出会ったりしました。本当に勉強になり、人に恵まれてきたなと思っています。これからも今以上にいろいろな人に出会えると思います。その出会いを楽しみ、大切にして、自分の糧に変えていきたいと思えます。



大洲市大洲一〇〇五



# 先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

## 「把翠」を緝く(十三)

### 「巻頭言」集

### 『愛媛教育』誌より

#### 「笑を失える日本人」

日露戦争前後五年間日本に駐在せる仏国公使ルイ、バレン氏は、大正十三年再び我国に來遊して日本紀行を著したが、其の中に「笑いを失へる国民」といふ一章がある。堀口九万一氏の遊心録の中の訳を左に摘録する。

日露戦争前後、余は毎年春秋二回必ず二三週間日本の各地を旅行した。其の当時の日本は物質上からいへば今日よりは遙に劣つてゐた。劣つてゐたといふよりは寧ろ、生活が極めて簡易であつた。併し国民の元氣は今日とは比較にならぬ程緊張してゐた。田舎で出会ふ人も孰れも元氣のよい顔をしゐたし、貧しい家からは、元氣の好い歌が聞え笑声が漏れ、笑に満ちた顔が窺いてゐた。

然るに其の後僅か二十年やその今日、茲に再び見る日本人は

何といふ変りかあであらう。成る程富の程度も、文化の設備もその

当時より遙かに進歩したる事は争はれ事であるが、国民全体の元氣は比較にならぬ程衰へた様に見える、……こゝで氏の觀察せる多くの事例をあげて、……今や日本人の総てが神経衰弱症にかゝつてゐるのではないかと思はれた。

日本の人々はこの神経衰弱の鬱病状態をば、専ら生活難から生まれた現象だと云ふのであるが、そうばかりとは思はれぬ。国民一般の生活程度は、二十年前よりは改善せられ一般に富の程度も増進してゐる。国民に元氣があり氣力があれば、生活難など、頻りに歎く理由がない。貧乏でも元氣でさへあれば人間は自然と愉快な表情を有つものである。苦し生活難の事を云へば、二十年前の方が今日よりは一層生活難であつたのである。

る。然るに其の当時には生活難を今日の如くに口にしなかつたではないか。だから今日この神経衰弱患者を救済せんが為には、富の増加を計るよりも、国民にある理想を与へて其の元氣を振作すること

が第一である。元氣を振作せずして、徒に物質的の富ばかり増進した所で、治療には何の役にも立たないのみならず、却つて益々其の患者を多くし、且つその病を深からしめるのみである。

……日清日露の两大戦に日本が百戰百勝したのは、笑を胸中に貯へた国民、即ち元氣で愉快で快活な国民であつたからであつたと思はれる。然るに今や日本時は其の当時の元氣を失ひ、面上の笑をす

からとて、其の国民が元氣を喪失して笑顔を滅却し、勇往邁進の精神と氣力を失つてしまつたら、鳥のゐない鳥籠同様、見るからに淋しく悲しいではないか……

バレン氏の西遊から既に七年、氏の指摘した欠陥はどうなつたであらうか。勿論、長い間雪に鎖された地上に雄々しくも若芽の萌える様に、全国のここそこに勇ましい農村振興の雄叫びが聞こえぬ

ではないが、全体的に見れば却つてこの欠陥が一層深刻になつたともいひ得られる。我々は少なくとも青年男女に撥刺たる元氣を持たしめることに努力しなければならぬ。其の為には彼等にはつきりした理想を把握せしめる事だ。(昭和六年五月号)

#### 「制度よりも人」

教育制度改造の叫びが大きくなるに連れて、真剣味を帯びてきた。諸種の社会不安、社会欠陥の根元を深く究めんとする時、勢ひこの教育制度に及ぶのは当然であつて、さてこそ思想国難経済国難等の深刻となるに従つて、教育改造の叫びが真剣味を帯びてきたのである。我が国現行の教育制度の確立されたのは明治の初期である。従つて其の内容、組織等に著しく啓蒙的色彩の有るのは当然とし

ては無理からぬ事であつた。其後社会事情の変遷に従つて幾多の改正が行はれたが、それらは根本的の改正ではなく、この濃厚なる啓蒙的色彩のみは依然としてつきまといつてゐる。これは、教育制度が、社会事情の変遷推移に深き理解と洞察とを欠いて、余りにも奇形的に發達せる事を物語るもので、教育制度改造論者が、一様にこの点を指摘してゐるのは当然のことである。然らば如何に改造せらるべきか、この点に言及することは紙面が許さないが、茲にいはんと欲するのは「制度よりも人」といふことである。制度を生かすも殺すも人だ。いくら教育制度が改つても、教師、生徒、それから生徒の父兄の考え方が依然として旧の如くであるならば、其の結果は蓋し想像するに難しくない。

教育制度の改造、もとより結構ではあるが、それよりも先に、明治初年以來国民の脳裏に植え付けられた、教育につきての謬れる觀念を改めるのが急務ではないか。約言すれば今こそ、国民全般が教育に対する考えを清算しなければならぬ時期ではないだろうか。(昭和六年六月号)

# 村上節太郎先生を偲ぶ



小野植元幸  
(昭和二元卒)

先生は、内子町(旧五十崎町平岡にて、明治四十二年十月十二日出生。昭和一〇年東京文理大学理学部地理学科卒業し、同年今治高等学校、北予中、愛媛師範学校に奉職。新制大学に移管と同時に愛媛大学法文学部退官するまで四十年間、子弟の教育に、数多くの教育者や地理学者育成に貢献された。

先生との出会いは、昭和二十七年入学と同時に「地理科」を受講。当時、県下は交通の便が悪く、地勢に疎く講義を受けて視野が広まった。当時先生は、四十六歳働さざかり。自分が調査したり、踏査されたことを、わかりやすく、地図・写真・統計等提示して熱弁のある授業であきることがなかった。



村上節太郎先生

た。授業中は、少し禿かかった頭で汗をふきふき、赤ら顔で語られていた。

土、日、休日は、リュックサックを背負い、県下一円と写真機を携行して、各地の風景・風習、伝統行事、風俗を撮り続け、研究資料作りに努められた。当時、交通の便が悪く、船、バス、自転車を利用。山や島は歩いて、人家に泊まって調べた苦労話もあった。

特に、越智郡大長村の「柑橘栽培」の研究に情熱を注ぎ、「ミカン博士」として名が知られた。地理学ばかりではなく、他の分野でも調査研究された。四国遍路道と道標の調査をして造詣が深かった。衛門三郎と石手寺の話等印象に残っている。先生の著書第一号は、昭和二十四年「私たちの郷土・愛媛県」四十三歳の時。戦後四年目のため、物不足の頃で泥紙、茶色、百二十ページ。今では消えている貴重な写真、資料が掲載され、戦後まもない時によく研究されたものだと思う。

昭和三五年(一九六〇)理学博士の学位取得。旧五十崎町にも貢献。町文化財保護審議会議長。五十崎風物館に、世界の風を寄贈し運営委員。館建設や世界、日本の風収集に尽力された。町観光協会顧問。町誌編集委員等につかれ、幅広い知見で郷土発展のために尽力された。昭和五〇年十一月の「内山地歴史話会」設立(内子・五十崎両町)にも貢献。

平成元年「一五年のあゆみ」の書物を発行。その後「郷土うちこ」と名称はかわったが継承。年一回冊子発行三四号である。私も冊子に参加させていただいている。先生は多大な功績で平成六年、五十崎町名誉町民の称号を授与。愛媛県伝統的特産品振興対策委員長、愛媛県史編纂常任委員。愛媛観光コンサルタントなどの要職につかれた。その功績により、昭和五五年(一九八〇)愛媛教育文化賞を受け、昭和五六年(一九八一)勲三等旭日中綬章。昭和六二年(一九八七)愛媛出版文化賞。平成五年(一九九三)愛媛放送賞授与。愛媛大学退官後、聖カタリナ大の客員教授につかれ、愛媛教育の発展につくされた。

平成七年(一九九五)一〇月二四日、享年八十六歳で永眠された。著書も多く後世のために残されている。



昭和24年8月5日発行

## 会報の送料納付について

・平成二十八年二月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。  
出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

### 記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇二六四〇一七二七五四  
送り先 〇七九〇一八五七七

松山市文京町三  
愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。



文 芸

川 柳

子 を 叱 る



丹下 友和  
(昭三愛師)

未来へと素質輝く子は宝

欲得が無いから染みるおもてなし

おもてなし笑顔に心癒される

柔らかい方に引かれる人当たり

粗探し止めて良いとこ褒めてやる

怒鳴るよりじっくり諭す低い声

駄目ダメと訳も言わずに子を叱る

ダメダメと駄目な叱りで子をダメに

叱り方下手で反感ばかり買う

聞き飽いたママの小言に子はそっ

ぽ

決め付けず子の言い分も聞くゆと

り

子を叱るうかつな言葉傷付ける

愛情の不足へ荒れる子の心

豊かさに慣れてちつともせぬ我慢

子を叱るあれもこれもと多過ぎる

(☎) 791-1104 松山市北土居五丁目

一 一三九

絵 手 紙

自然の移りかわり

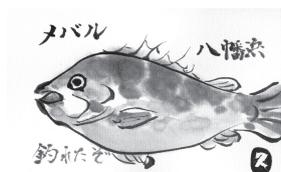
宮内 久司  
(昭三一卒)

田舎では当たり前に見られた自然の風景や動植物が年々少なくなり変わってきていることに気づく。私の住む小野は松山市の東端にあるが宅地化が進み、以前は水田を渡る涼しい風に気持ちのよい夏を過ごしていたが、今は窓を閉め切ってクーラーに頼るしかなくなった。喧しいくらいの蛙の声・ホタルを見ることもよくあった昔がなつかしい。五十年前前になるが、教科書に載っていたイラガのまゆの実物を見せてやろうと探し回ったがどうしても見つけることができなかった。今はそのイラガに悩まされている。一方でめつた



(☎) 791-0242 松山市北梅本町

七四一



俳句

米寿記念千句集より

春夏秋冬

平野 範里  
(昭二九卒)

東温市一畳庵吟行  
 城師仮寓一畳庵てふ若葉光  
 片手椀僧の読経や涅槃ねはん西風  
 読む答辞途切れ途切れや卒業式  
 早春や空海の道辿る日々  
 特攻兵たりし頃  
 母に髪送りし日あり敗戦忌  
 快晴や石鎚霊峰山開  
 麦藁帽並びし波止や太公望  
 将棋指す片手団扇や涼み台  
 晩秋や情ある句をと師の訓へ

滑床吟行

秋水の千畳敷を滑りけり

灯火親し手擦れ歳時記座右にあり

身に入むや北朝鮮の拉致解けず

冬晴や逆打ち遍路磴百段

国民の寿くじなみぐ日なり大旦あした

対峙せる阿吽あうんの仁王冬の門

無為無策日々を過してはや師走

—————\*—————

俳句人生五十年。鶴・洪柿に所属しながら私なりの取り組みをしてきたつもりである。感動の記録・俳句日記としての句は私の俳句観でもある。一日の中で感動することとは誰でもあると思う。その感動を僅か十七音でまとめなければならぬのであるから、ことばの料をみつけないければならない。読む人に共感を得、理解していただける句を作りたい。最近は特に情のある句をと心掛けています。

十年前に喜寿記念として「青柿千句集」を発刊した。今年には米寿にあたることから米寿記念「青柿千句集Ⅱ」を発刊する予定で、平成十八年から二十八年で千句を選んでいく最中である。

同窓会誌の投句依頼を受けたので米寿に近い四年間から春夏秋冬を四句ずつ選び計十六句を投句することにしました。実に気楽な投句である。こんな俳句の趣味をもつ者もあるんだと笑止されたい。

☎ 798-0054 宇和島市笹町 一三二二九



短歌

荒地に花を



平井 直子  
(昭二五卒)

道の辺の荒地耕し花あまた植えて  
 過ぎゆく晩年の日々

道の辺の花畑ぼたに来て草抜くは苦を  
 抜くに似て心ほぐるる

元気よく挨拶くるる登校の子らを  
 花畑に立ちて見送る

草抜く手合はせて遍路を見送りぬ  
 露しとどなる花の中より

わが夫の殊に好みし白牡丹咲きき  
 はまりてかすかに揺らぐ

世界地図拡げてけふも国境を越ゆる  
 難民のニュース見てをり

夜もすがら轟々と吹くやまじ風東  
 北を思ひ九州思ふ

とよし  
 灯あげ読む正信偶きはまりて淋しきけふの心を救ふ

わが唱へわれにきこゆる念仏はわれを見給ふみ仏の声

めぐりより支へられ過ぎゆくわれの日々 八十五歳感謝あるのみ

—————\*—————

朝五時頃目をさまし手足の動くことを確かめ、新聞を読み六時二十五分テレビに合はせ体操をしております。ポケットに歩数計を入れてしばらくあちこちと歩いています。私の家は旧道「遍路道」に沿っており向いには管理者のいない空地が草にまみれて抜がつておりました。四畝ぐらいいはあるでしょう。退職後少しづつ手入れますようになり今では一年中、次々と花が咲いて慰められております。



# 会員の声

## 師範学校から教育学部へ

— 百四十年の歩み —



副会長  
峯本 高義  
(昭三〇卒)

八月二十日(土)開催の「第十五回愛媛大学教育学部同窓会懇親会」は、愛媛師範創立百四十周年記念懇親会の副題のもと松山全日空ホテルで盛大に行われることになっている。

師範学校制度最後の卒業生一人として、本県の師範学校の沿革と戦後の混乱期の師範学校の様子を記してみたい。

### 一、愛媛師範学校の沿革

愛媛県師範学校は、明治九年(一八七六年)松山市二番町で開校式を行い発足した。その後、愛媛県伊予師範学校、愛媛県師範学校、愛媛県尋常師範学校などと校名を改称しながら、明治二十三年には松山市木屋町に校舎を新築し

移転した。

明治四十一年には、再度愛媛県師範学校と改称、女子部は明治四十三年温泉郡三津浜町に愛媛県女子師範学校として分離独立した。昭和十八年師範学校制度が、文部省直轄となり、名称も愛媛師範学校となり男子部(木屋町)、女子部(三津浜)として再び統一された。

### 二、松山大空襲による校舎焼失

愛媛大学五十年史によると「昭和二十年七月二十六日の夜半、松山市は米軍爆撃機の大襲撃を受け、松山市中心部はほとんど灰じんに帰した。木屋町にあった男子部の校舎は全焼した。九月からは戦災を免れた三津浜の女子部校舎で本科生、太山寺本堂、宿房、同地区の公会堂で予科生の授業が行われた。」とある。

### 三、師範学校から教育学部へ

昭和二十年八月十五日、日本は

終戦を迎えた。日本の教育制度は大きく変化した。昭和二十四年には愛媛大学教育学部が発足し、師範学校は「愛媛大学愛媛師範学校」と改称された。そして二年後の昭和二十六年三月三十一日を以ってついに廃止された。ここに明治九十年に発足した愛媛師範学校は、そのすべてを愛媛大学教育学部に引き継ぐことになったのである。

愛媛の師範学校は七十五年の歴史であった。今年には教育学部発足六十七年と合わせて百四十周年となる(二年間のダブリがある)。

### 四、私と師範学校

師範学校を受験したのは私の意志からではない。七人兄弟のうち兄二人と姉一人が師範学校に進学していたので、父は末っ子である私にも師範学校への進学を考えたのであろう。片田舎の貧しい農家の子供に教育を受けさせるには経済的にも師範学校が最善だと思っ

たのではないだろうか。

### 五、入学試験と入学式

昭和二十二年の春、師範学校予科を受験することになった。当時兄が本科二年に在学中であったので、受験、入学に関するすべてを取り仕切ってくれた。以下兄の日記から要点を記してみたい。

三月三十日 弟の受験のため三津浜の一色旅館に投宿、一泊二人で七十円取られた。後から客が来て八畳の部屋に五人である。

三月三十一日 弟の受験日、学力検査、身体検査あり。合格せんことを祈る。弟の話では試験は成績良好という。

四月一日 口頭試問あり、諸注意をして送り出す。

四月九日 合格発表を見に行き。幸いにも弟は合格していた。恐らくは駄目であろうと思っていたが予想は違っていた。合格は良いが親は二人の学資に困るだろう。

五月二日 弟の入学式。三津の女子部講堂で行われる。弟は二組である。校長が師範タイプをなくすようくどくどと説明していた。

五月五日 弟が新しい社会へのスタートを切る初めての出校日である。太山寺まで連れて行ってやりたいが、自分の事もあり、予科

二年のK君にたのんで連れて行ってもらおう。

### 六、太山寺での学習

当時松山市は焼け野原で下宿できるといふ家はなく東は今治市、南は大洲市くらいのは通学生とされた。通学不可能な者は太山寺の宿房や地区の公会堂が寮となっていた。寮といっても昼間は教室となるのである。

私は上灘町(現伊予市双海町)で兄と同宿していた。通学は上灘駅→松山駅→伊予鉄江戸町駅(現大手町駅)→三津駅で下車、歩いて太山寺まで雨の日も風の日も雪の日も約二時間かけて通学した。

太山寺での勉強が始まったが、学校といえるようなものではなかった。昼は教室、夜は寮で畳敷きの部屋に長机を並べ座つての学習は江戸時代の寺子屋同然であった。うす暗い部屋には天井から裸電球がぶら下がっていたが雨の日には暗くて文字を書くにも苦労したほどであった。

雨の日には休講となる先生が多く、なんのために苦労して登校したのかと思うことも多かった。休講の時には部屋のうしろに片付けられている枕を投げ合せて遊んだのもなつかしい思い出である。

前年度入学の二年生には軍隊



愛媛師範学校跡地に建つ記念碑  
(松山市若草町)



愛媛県女子師範学校跡地に建つ記念碑  
(松山市須賀町)

(予科練) 帰りの人が多く、何かにつけてよくしごかれた。本堂の板間に正座させられ「ことばづかいが悪い」「礼儀が悪い」など何かにつけて注文づけられた。直接ビンタを受けるようなことはなかったが長時間の正座は本当につらかった。

来年は下級生をしごいてやろうと話し合ったが、次年度からは募集停止、万年下級生で予科四年間を通すことになったのである。

七、男女共学一番のり

太山寺での学習は一年で終り、昭和二十三年度には三津浜の女子部校舎で授業を受けることになり通学は楽になった。とはいっても高浜線の朝の電車は超満員であった。山西駅近くには新田中学校、新設された松山外国語専門学校があり江戸町駅(現大手町駅)から

の乗車はいつも大変であった。それでも楽しかったのは女子部の生徒と共学になり、なごやかな雰囲気の中ですべてが進行したことである。県下の学校ではまだ共学になっていない学校はなく、男女共学一番のりであった。

八、三津浜を追われて

男女共学で喜んだ三津浜での生活もそう長くは続かなかった。当時、警察予備隊(自衛隊の前身)の松山駐屯の話がありその候補地が三津浜の女子部であったからである。

愛媛県、松山市、学校の間で旧城北練兵場(現愛大キャンパス)との交換の話が進み、昭和二十四年四月には愛媛大学教育学部がこの地で誕生したのである。

九、城北の現在地へ

三津浜の地を追われるようになった私たちは焼失した木屋町の焼け跡に建てられたトタン屋根のバラック校舎で授業を受けることになった。通学は楽になったがこの校舎は雨が降るとトタン屋根に反響して先生の声がとどかず風の強い日には「すさま風」になやまされた。照明は暗くとても授業を受けるような状況ではなかった。

昭和二十四年四月に旧練兵場で誕生した教育学部の新校舎増設は



女子師範学校の白楊会館  
(現在は民間所有)

円満には進まなかった。当時この練兵場には、海外からの引揚者、罹災者等がバラックを建て住みつき、近隣住民等も野菜などを栽培し明け渡しをこぼんでいた。それらを一挙に解決したのは松山市主催の「市制六〇周年記念産業復興大博覧会」(24・3・20から二か月)であった。

博覧会終了後土地と建物の主なもの師範学校の土地と交換に教育学部に寄付されることが事前に話し合われており、会終了後、本格的に復興が進んだ。

昭和二十五年には、私たち予科生も城北練兵場の現在の大学キャンパスで授業を受けるようになった。当初はあの広いキャンパスを教育学部だけが使用しており、先に述べたように近隣住民等が耕作地として使用していた部分が多かった。

井上宮久学部長の指揮のもと、収穫前の作物を取り除く作業が何回も行われ、住民たちとトラブルになることが再三あった。今思い出しても気の毒なことをしたとの思いが強い。

太山寺↓三津浜↓木屋町と転々とした私たち最終ランナーの予科生は、やっとゴールにたどり着き昭和二十六年三月二日、愛媛大学愛媛師範学校予科修了の證書をいただき、ここに愛媛の師範学校制度は完全に終わったのである。

十、教育学部三期生として

私たち予科修了生の進路は、教育学部四年課程、同二年課程へ進学する者、進学をしないで社会に出る者の三つであった。私は四年課程入学を目指し必死に勉強した。外部からの受験生といっしょに入学試験を受け合格することが条件であったからである。幸いにも初等教育学科に入学を許され、昭和三十年三月第三期生として卒業し、県下の公立学校の教員として勤務することができたのである。

一般人試という関門を経たとはいえ、同じキャンパスに落第もせず八年間も在学したのは私たちがらいではないだろうか。

参考資料

- ・愛媛大学教育学部同窓会会員名簿 (平成八年八月発行)
- ・愛媛大学五十年史 (平成十一年十一月発行)

祝・叙勲

(平成二十八年四月二十九日)

☆瑞宝双光章

教育功労賞

浅田 淳 殿

宇和島市吉田町立間尻一九六一 (昭和四十三年卒)

教育功労賞

中城 英雄 殿

西予市城川町かき尾一八四六 (昭和四十三年卒)



転 依

『唯識三十論』における



吉原 宏文 (昭四二卒)

「今・ここに」息づいているわれわれ自身の経験世界の分析にさして、その基本的構造関係を示す哲学用語である客体 (object) と主体 (subject) に相当する用語は、『唯識三十論』ではgrāhyaとgrāhakaである。それはともに動詞語根「grāh」より派生した用語であるから、その原義である「つかみとる」という占有の義を強く残している。従って、漢訳では所取・能取を配当している。「取」は文字通り「とる」義であるが、これから「把握する、知覚する、認識する、観察する、執着する等」の認識論的価値論的諸概念が派生し、それを包含するものであり、これにそれぞれ能・所を冠する。「能」は動作の起点を、「所」はその終点を示す。あるいは「能」は能動的であり、「所」は受動的である。このように、能・所は全く相対立する概念である。これを

現代語訳するなら、grāhyaは「認識される客体」であり、grāhakaは「認識する主体」ということになる。われわれの「経験識」は固定的不変的な静止状態にあるものではない。ダイナミックな流動として一瞬たりとも止まってはいない。このような経験識のダイナリズムを世親 (Yasubandhu) は、識転変 (vijñāna-pariṇāma) という独自の用語法によって精緻な論理を展開し、それは安慧 (Sthiramati) によって更に詳しく注釈されている。次のように言う。

いったいこの転変 (生成変化) とは何であるのか。変異性 (他のものに変換すること) である。転変 (生成変化) とは、因の刹那 (直前過去) の消滅と同時に、因の刹那 (直前過去) とは相の異なった果

の自体 (直後未来) が生起することである。

これは、非常に純化され凝縮された経験識の時間論であり、われわれの日常性における常識的時間論とは根本的に相違する。世親はこの経験識の時間系列であるこの識転変を思惟基準として、われわれの経験世界の全体構造を真実最高の認識 (勝義) においては実体的なものではない、ただわれわれの分別 (概念構想) が識転変の系列上に仮設 (仮構) されたにすぎない、というのである。本論第一偈に言う。

この経験世界において、我 (主体存在) と法 (客体存在) という多種多様な仮設 (概念的仮構) が生ずるのは、この識の転変 (生成変化) に依るものである。

同じく、本論第十七偈に言う。識の転変 (生成変化) がいわゆる分別 (概念構想) である。この識の転変によって分別される対象は実在しない。従って、この経験世界の全体は経験識にすぎないもの (唯経験識) である。

しかるに、われわれの日常的世俗的な判断習慣では、grāha-dṛṣya

(二種の執着)、すなわちgrāhya-grāha (所取の執、認識される客体への執着) とgrāhaka-grāha (能取の執、認識する主体への執着) によって、この経験世界の構成要素である我 (主体存在) と法 (客体存在) との種々相は実体的に把握されているのが現実である。現実的諸判断においては主観と客観との分岐 (認識の二部門) が常識である。(小さなめだかにも眼がある。) われわれは、なによりもまず、経験の根拠を有身見 (satkāyadṛṣṭi、肉体的個体存在を自我と想いなす見解) に求め、二種の執着を離そうとしない。従って、われわれの認識の基本形式は、「私は眼などによって色・形などを認識している」ということである。grāhakaなる私が、grāhyaなる色・形 (物) を眼識などといった肉体的感覚諸器官を媒介として認識している、ということである。この認識の基本形式によるかぎり、われわれの経験識は、眼・耳・鼻・舌・身の諸識なる肉体的感覚的認識が優先している、ということになる。

この際、この基本的認識作用における経験識は、この基本的認識作用から派生する反射的反作用 (kleśa、煩惱) によって情緒的目的的であり、同時にまた、この基本的認識作用から派生する解的的反作用 (karma、業) によって、われわれの経験識は社会的倫理的になる。要するに、われわれの日常的認識機能においては、この基本的認識作用の上に自然発生的に随伴してくる二つの反作用 (karmakleśa、業と煩惱) が絡み合い、認識機能そのものがある程度まで目的化し、具体化しているのが常である。

このような感覚的認識の基本形式は、限定的ながらある空間的拡がりを予想させる。すなわち、grāhaka-grāha (認識する主体への執着) と、その主体によって選ばれたgrāhya-grāha (認識される客体への執着) との相関的対応領域は、強調された自我意識 (虚妄分別、abhūta-parikalpa、あるいは遍計所執、parikalpita) の場である。

さて、「経験識」の唯識的分析をすすめるにあたって、これまで経験識の表層構造 (上部構造) をなす感覚的認識に視点を置いて述べてきたのであるが、われわれは次に、感覚的認識の基礎であり

経験識の深層構造（下部構造）でもある非感覚的認識の存在を確認しておかなければならない。つまり、感覚的認識は非感覚的認識と融合一体になって機能しているのであり、感覚的認識は非感覚的認識の巨大な前景と後景から引き出されるのである。そうでなければ、いかなる明確な感覚的認識も現在の事実となることはありえないのである。これは、『唯識三十論』における阿頼耶識 (ālaya-vijñāna) と転識 (pravṛti-vijñāna) との関係に相当するものであって、これによって経験識の全体構造が説明されるのであるが、今はそれに触れることはできない。

ところで、われわれの「経験識」において、非感覚的認識の最たる実例は、転変 (pariṇāma、生成変化) の時間系列におけるわれわれ自身の因の刹那 (kāraṇa-kṣaṇa、直前過去) についての知識である。われわれの直前過去は経験識の機会 (occasion) あるいは融合した機会群によって構成されている。だから、直前過去はその直後未来なる即時的現在 (kāryasāma、果の自体) との間、認識可能ないかなる仲介物も介入しないで経験される。おおよ

ざっぱに言えば、直前過去は十秒前と十秒前との間に横たわっているわれわれの過去のほんのおすそ分けである。直前過去は過ぎ去ってしまう、がなおここにある。直前過去は疑う余地のないわれわれの自我意識であり、今・ここなる存在の根拠である。

例えば、われわれの生活環境の上であるとき、「怒り」なる感情 (煩惱, kleśa) が起ったと仮定しよう。その怒りの感情は何らかの与件 (grāhya) を経験しているわれわれの経験識である。十秒後、経験識は意識的あるいは無意識的に現在における与件としてその過去を具体化し、過去からの与件 (grāhya) である怒りの感情を現在において維持している。その感情が自我意識の照明の内に落ち込んでくる限り、経験識は過去の感情の非感覚的認識を受けとって行く。経験識はこの感情を過去に属するものとして客観的 (grāhya-grāha) にも、かつまた現在に持続しているので主観的 (grāhaka-grāha) にも受けとっている。この経験識の持続 (相続) が転変 (pariṇāma) である。ゆえに、非感覚的認識は転変の一局面である。

このような vijñāna-pariṇāma (識転変) は、直前過去 (kāraṇa-kṣaṇa、因の刹那) を前提条件としてそれとは他なる直後未来 (kāryasāma、果の自体) を生成変化させる持続 (相続) であるから、文字通り依他起 (paratantra) と呼ばれる。本来、依他起を本質 (svabhāva、自性) とするにもかかわらず、われわれの判断習性である grāha-draya-vasāna (二取習気、認識される客体と認識する主体とこう二種の執着の蓄積してきた潜勢力) によって、それを実体的に構想し、固執 (parikalpita、遍計所執) しているのである。そこで、この本質的には依他起なる識転変あるいは分別から二取を排除 (遠離) して、識転変そのものあるいは分別そのものとして純粹経験するとき、無二知 (advaya-jñāna) なる唯識性 (vijñapti-mātrata) が明証され真実最高の認識 (勝義) へと転換されるのであって、これが完全な実在 (pariniṣpanna、円成実) といわれる。この一連のプロセス (断惑証理、すなわち煩惱を断つて真理を証すこと) が転依 (āsraya-paravṛtti) (根本的転回) であり、虚無の深底を突

き破つて仏の世界と一枚となれるのである。有名な妙好人、浅原才市翁の頌……  
虚空世界がみな仏 わしもその中 南無阿弥陀仏  
平成二十八(二〇二〇)年二月二十七日  
(父の祥月命日にて)

参考文献

Vijñaptimātrakaśiddhi: Vimsūtika et Trimsūkā, par Sylvain Lévi. Paris, 1925  
Adventures of Ideas: A.N. Whitehead, Part III  
Philosophical, XI Objects and Subjects  
「中観と唯識」長尾雅人著、岩波書店  
「世親唯識の原典解明」山口益・野沢静証著、法蔵館  
「唯識三十論」荒牧典俊著、中央公論

☎ 731-0135  
広島市安佐南区長束  
1-1-181515



## 第7回「愛媛大学ホームカミングデー」開催のお知らせ

日時：平成28年11月12日 (土) 13:00 ~  
※当日は学生祭も開催されています。  
場所：愛媛大学キャンパス

卒業生の皆様、青春時代を授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしいキャンパスに戻ってきて、散策しながら恩師との交流、旧友、後輩との交流、在校生との楽しい語らいの時間を過ごしてみませんか。

**教育支援リスト**

愛媛大学教育学部は、地域に立脚する大学という立場で、教育実践現場と連携・交流し、よりよい双方向的な関係を作ることで、地域の教育改善に資することができるのではないかと考えています。

その考えに基づいて、愛媛大学教育学部は、地域の教育研究・教育実践の充実・発展、教員養成・教育研究の充実のために、相互に連携協力する旨の覚書を、松山市教育委員会（平成14年5月）、今治市教育委員会（平成15年4月）、愛媛県教育委員会（平成15年8月）と取り交わしました。その趣旨は、当然、愛媛大学教育学部が立脚する地域全体を視野に入れるものです。

『愛媛大学教育学部～学校教育支援のための教員リスト～』は、こういった地域との連携協力の事業の一環として、これまで作成されてきました。本リストには、愛媛大学教育学部教員が、その専門性を生かしながら、教育実践の場にもどるようにかかわることができるかという情報が、一覧の形で示されています。

1. 教育行政及び学校運営・経営等に関するもの …… 〈3件〉  
(中央教育委員審議会、教育課程審議会、施設・設備、安全教育等)
2. 教職員の資質等に関するもの …… 〈5件〉  
(教師論、教員養成等)
3. 学習指導・教科教育等に関するもの …… 〈54件〉  
(教科、総合的な学習の時間、N I E、図書館、教科書、L D、教育測定・評価、コンピュータ等)
4. 専門的内容等に関するもの …… 〈60件〉  
(各教員の専門に関する内容等)
5. 生徒・生活指導等に関するもの …… 〈8件〉  
(いじめ、不登校、学級崩壊等)
6. 「生きる力」等に関するもの …… 〈7件〉  
(道徳、特別活動、福祉・ボランティア、進路指導、地域と教育、健康教育、環境衛生、性教育、給食・食生活等)
7. 特別支援教育に関するもの …… 〈20件〉
8. 現代的教育課題に関するもの …… 〈10件〉  
(法教育、キャリア教育、金銭教育等)
9. その他に関するもの …… 〈7件〉  
(法教育、キャリア教育、金銭教育等)

**放送大学入学生募集のお知らせ**

放送大学では、平成二十八年十月入学生（教養学部、修士選科生・科目生）を募集中です。  
 〈募集期間〉六月十五日～九月二十日

平成二十九年大学院修士全科生学生を募集中です。  
 〈募集期間〉八月十六日～八月三十日十八時必着

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では、心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々には、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**

の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。

資料を無料でさし上げておきます。お気軽に、**愛媛学習センター**にご請求ください。



**放送大学**  
 教育に関連する科目を多数開講しています  
 一科目からでも学べます  
 平成28年度10月入学生募集中！  
 (平成28年9月20日まで)  
**愛媛学習センター**  
 (愛媛大学内)  
 TEL 089-923-8544



# 同期会

## 昭和三十三年

### 卒業生同期会

村上 嘉一  
(昭三三卒)

平成二七(二〇一五)年一〇月二五日(日)、十三時〜十六時、松山市道後姫塚の「にぎたつ会館」において、昭和三三(一九五八)年三月に教育学部四年課程を卒業した同期生の会が開かれた。

卒業後、早くも半世紀をこえる年月が過ぎ去り、同期生の皆さんも傘寿を祝う歳となった。まさに「光陰矢の如し」である。

資料によれば、同期生(四年課程中等科・初等科卒業生)の総数は百五十三名であった。今回は、そのうち二十六名が出席した。

この同期会の初回は同期生・長岡さんが発起・諸々の世話をし下さって、松山市祝谷のエスポワール愛媛文教会館で、平成一一(一九九九)年一〇月二日に開かれた。出席者は四十五名であった。その後、ほぼ、年に一回のペースで、会場・事務局を東予・中予・

南予・愛媛県外の岡山へ移して、それらの地域に住む同期生諸氏の世話で本会が開かれてきた。

今回は松山在住の泉さん、一柳さん、大倉さん、柏井さん、永井さんと村上の六名で企画・立案し、実施できた。

宴会の座席は、柏井さんが作った、近づく新年の干支・サルと同期生の「傘寿」を祝うツルの折り紙と抽選で決められた。

開会にあたり、先ず全員で今は亡き友へ出席者全員で黙祷し冥福をお祈りした。

大倉さんが開会の挨拶をし、一同の乾杯の音頭は遠路・観音寺市から出席の木下淳さんの発声に合わせ一同元氣よく杯をあげた。

五十年以上も前の昔日の懐かしい思い出、これからの人生など……あちらこちらのテーブルで歓談の輪が広がり時間の経つのを忘れるほど盛り上がった。

出席者の「近況報告」がはじまった。「釣り吉三昧で日々を楽しんでいる」、「毎年、海外旅行に出かけ、今年はミャンマー行きを予定している」、「どんどんと太って洋服が合わなくなっている」、「畑で

野菜作りに熱中しているがイノシシにスイカを食べられて……」、「毎日、五千五百歩ほど歩き、旅行にも出かけアンチ・エイジングに努めている」、「傘寿となったが、米寿の時には絵の展覧会をしたい」、「前回に話した魚篇(へん)の付いたいろいろな漢字をずっと集めている。ドジョウとスケソウダラを漢字で書けますか?」、「三崎半島に出かけタカの集まるところを探索している」、「ため池や遊休農地の世話をしたりで地域の人の関わりを大切にしている」、「フォークダンスを楽しんでいる」、「折り紙ボランティア活動に参加している」、「植物探索をしてインターネット・ウェブ『知恵の輪』上のデータ(愛媛の植物図鑑)を豊かにしている」、「外国人観光客のためのボランティアガイドグループに所属して英語の楽(がく)習をしている」、「今日は朝四時に発ち松山へ駆けつけた」……などカラフル報告で、一同感心したり微笑んだり賑やかだった。

宴会が盛り上がったところで、泉妙子さんのキーボード伴奏に合わせて懐かしいメロディ「愛媛大学学歌」、文部省唱歌「ふるさと」、流行歌「雪山賛歌」、「星影のワルツ」などを全員で合唱し、ファイナー

レとなった。

岡山から参加した河合健さんの音頭で「同期生一同の健康と多幸を祈念し、元気で再会しよう」と誓い合い参加者全員で万歳三唱をし、お開きとなった。

『欠席者からのメッセージ』が四十三通届いた。「健康第一に毎日歩行等に気を付けている」、「八十歳を過ぎたので、今年、福岡で行われる居合の集団演武を最

後にしたい」、「秋季ソフトテニス選手権・市民スポーツ祭へ当日参加選手及び役員として参加します」、「半世紀経過しても青春城下町での四年間は今でも宝石の様です」……などの「元氣」便りに加えて、十八通は何らかの体調不良に関する内容であった。同期生の皆さんの健康を祈ると共に元気で再会できることを期待しつつ散会した。



愛媛大学教育学部 昭和33年卒業 第15回同期会  
平成27年10月25日(日) 於 にぎたつ会館



## 久枝幼稚園で父の日プレゼント製作 「藍の絞り染め」を行いました【5月18日(水)】

平成28年5月18日(水)、教育学部の学生が、私立久枝幼稚園で父の日のプレゼント製作として藍の絞り染めを行いました。

愛媛県の伝統の織物に「伊予絁」があります。久枝幼稚園は、この伊予絁を伝える伊予かすり会館の近傍にあるため、藍染めに親しんでいます。そこで、昨年度から本チームと協働し、藍染めを利用した父の日のプレゼント製作を行っています。昨年度の実施は、保護者の方に大変好評で、今年度も実施の運びとなりました。

今回は、4年生の新田紗瑛さん、濱口絵美花さん、濱田由鶴さん、3年生の岡田美季さん、影浦由奈さん、川本杏さん、河原林桃子さん、是澤遥奈さん、重松美美さん、2年生の柏木愛梨さん、眞鍋茜さんの11人の学生が参加しました。実施日までに園の先生方が園児たちと一緒に木綿ハンカチを絞り、当日は学生と先生方が協働で藍染めを行いました。晴天に恵まれ、園庭での作業となりました。子どもたちは藍染めの色の変化に興味深く観察し、作業を楽しんだようです。

久枝幼稚園の事例の様に、外部からの依頼によって事業を実施する状況が軌道に乗ってきており、本事業が地域に根付いてきたことを実感します。本事業を通じて、学生は地域の一員として自覚と誇りを持って、地域の方と協働しながら実践を行っています。



藍色になったハンカチを洗おう



はやく染まらないかな



できたぞ！

### 原稿募集

—次号 第百二十三号—

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

◇ 「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと

2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など

3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会でご選別させていただきますので、ご了承ください。

◇ 原稿〆切 十一月三十日

★ 発行 二月一日 予定

★ 字数

依頼者以外は千二百字厳守

四〇〇字詰原稿用紙の一行

を十五字にして書いて下さい。

★ 写真

筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

## 教育学部で読売新聞大阪本社による出前授業を実施しました 【5月20日(金)】

平成28年5月20日(金)、教育学部で、読売新聞大阪本社による出前授業を実施しました。今回の授業には、その場で新聞の印刷ができる「特別号外車」が来学しました。

当日は、教育学部、法文学部、大学院教育学研究科(教育実践高度化専攻(教職大学院)、教科教育専攻)の学生約20人が受講しました。講師は、同社広報宣伝部の伊東広路氏が務め、教育現場での新聞活用の進め方、新聞・新聞社・記者活動について、豊富な事例を提示しながら講義を行いました。また、新聞に関する模擬授業として、受講者が3~4人のグループを作り、それぞれのグループごとに号外の見出しを考えました。同社編集担当の石田輝夫氏が「特別号外車」でレイアウト・印刷を行い、配布された号外を読み比べ、相互評価を行いました。

受講した学生からは、「見出しを考えることで、ことばのもつ大切さと伝えることの難しさを感じた。」「新たな学習方法を学んだので、将来、先生になったときに実践してみたい。」という感想がありました。

授業を企画した教育学部社会科教育の鴛原進教授は、「学校教育や家庭、地域における新聞の重要性が指摘される中、新聞社の社会的責任や取材から印刷までの仕組みと迅速さ、授業での新聞活用などを体験的に学習できた」と述べ、成果に期待を寄せました。



特別号外車の前で記念撮影



特別号外車の見学



模擬授業の様子

[dosokai@ed.ehime-u.ac.jp](mailto:dosokai@ed.ehime-u.ac.jp)

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

↑  
メールアドレスは上記

教育学部同窓会  
インターネット  
開設しています!

要請連絡は、左記の所にメールして頂くか、FAX又はお手紙をお送り下さい。

1. 支援要請のねらい
  2. どのような事を
  3. 何時頃
  4. 何処で
  5. 誰が、どのような組織が
  6. どのような方法で実施する
- その為、同窓会からの支援を要請したい。

教育現場等で、同窓会へ支援のご要望がありましたら、左記のような内容で、同窓会へご連絡下さい。

**教育現場等から同窓会へ  
支援要請依頼について**

# 平成28年度 支 部 長 会 報 告

1. 日 時 平成28年6月11日（土） 10：30～14：00
2. 場 所 愛媛大学校友会館（松山市文京町3）2F 大会議室
3. 日 程
- (1) 開 会 挨拶 会長・学部長
  - (2) 各支部長 挨拶
  - (3) 議長選出
  - (4) 議 事
    - ア 会則改正について
    - イ 役員改選に関する件
      - ★ 新旧役員挨拶
    - ウ 平成27年度行事報告
    - エ 平成27年度決算報告・監査報告
    - オ 平成28年度行事計画
    - カ 平成28年度予算案審議
    - キ 支部活動と助成金について
    - ク その他事務連絡  
(内規に関する事項・会報発送・会館利・名簿 等)
  - (5) 閉 会 挨拶 副会長



## 4. 主な話し合い事項

### (1) 支部活動の活性化について

各支部長に前もって依頼していたアンケート等による提言を元に、支部活動をいかに活性化するかについて時間を掛けて話し合われた。昨年度も南宇和支部、伊予支部で「落語文化の普及を図る」のかけ声の下、地域の方々と協力し、古今亭菊志ん師匠をお招きし、大変盛会だったので、その経過報告を支部長にいただいた。

このように各支部とも予算が位置づけられているので、積極的な活動を公民館等と協力して計画してみてもはとの提言があった。

### (2) 教育学部と同窓会との連携活動について

平成24年度より予算にも位置づけ、教育学部では「サポーター制度」を設け、同窓生に働きかけ、講師になってもらい「コミュニケーション能力の育成」をテーマに、学生達に講演している。その活動の様子報告は会報を通じて行っている。非常に学生に好評であり、今後とも学部と同窓会との絆を強めるため同窓会は協力をしようと意志決定した。

### (3) 「支部活動特別助成金」について

支部活動をより活性化するための具体的な方策として、上記にある「支部活動特別助成」を配慮している。その為の資料として、「支部活動特別助成金交付要綱」と「申請手続き」を紹介した。

### (4) 県外支部長の参加があった

関東支部から森孝枝副会長、岡山支部・神崎順治副会長の参加があり、挨拶をして頂き、県外支部活動の現状と要望を話していただいた。

### (5) 今年度新しく、4人の新理事をお迎えした。理事選出も東・南予からも、もう少し多く選出してはとの意見があった。

### (6) 今回に於いても来る愛媛国体に備え、同窓会としてもどうサポートするか考えてほしいとの提案があった。

以上

平成27年度 行 事 報 告

平成28年度 行 事 計 画

4. 6 (月)	平成27年度入学式	学部生 235名 院生 53名
4. 13 (月)	平成26年度会計監査	監査実施
5. 12 (火)	第1回常任理事会	役員改選・同窓会活動・支部活動について
5. 23 (土)	第1回理事会	平成26年度行事、決算報告 平成27年度行事計画及び予算審議 役員改選案について審議
6. 6 (土)	支部長会	平成27年度本部役員改選 平成26年度行事、決算報告 平成27年度行事計画及び予算審議
6. 10 (水)	第1回編集委員会	会報120号 校正
7. 1 (水)	同窓会報120号発行	8,300部
7. 28 (火)	第2回常任理事会	同窓会運営推進対策について
8. 5 (水)	支部活動支援・援助	伊予支部文化活動(菊志ん師匠落語)
8. 7 (金)	第2回理事会	同窓会運営推進対策について
10. 22 (土)	支部活動支援・援助	南宇和支部文化活動(菊志ん師匠落語)
11. 14 (土)	第6回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会 参加
11. 14 (土)	各期代表者会	各期活動報告、相互交流
11. 26 (木)	学部サポーター制による講義	やのひろみ氏「魅力的な生き方講座」
1. 9 (土)	第3回理事会	年間行事の反省 新年度諸計画について
1. 9 (土)	第2回編集委員会	会報121号 校正
2. 1 (月)	会報121号発行	8,300部
3. 1 (火)	第3回常任理事会	27年度行事活動反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (木)	平成27年度卒業式	卒業生学部生 230名 院生 46名

4. 6 (水)	平成28年度入学式	学部生 170名 院生 55名
4. 14 (木)	平成27年度会計監査	監査実施
5. 12 (木)	第1回常任理事会	役員改選・同窓会活動・支部活動について
5. 22 (日)	第1回理事会	平成27年度行事、決算報告 平成28年度行事計画及び予算審議 役員改選案について審議
6. 4 (土)	同窓会懇親会世話人会	各期代表世話人による懇親会運営話し合い
6. 11 (土)	支部長会	平成28年度本部役員改選 平成27年度行事、決算報告 平成28年度行事計画及び予算審議
6. 11 (土)	第1回編集委員会	会報122号 校正
7. 1 (金)	同窓会報122号発行	8,300部
7. 28 (木)	第2回常任理事会	同窓会懇親会運営推進対策について
8. ( )	支部活動支援・援助	
8. 6 (土)	第2回理事会	同窓会懇親会運営推進対策について
8. 20 (土)	第15回教育学部同窓会懇親会	松山全日空ホテル4Fダイヤモンドボール
9. 13 (火)	第3回常任理事会	懇親会反省報告、後期諸計画、次年度活動について
10. ( )	支部活動支援・援助	
11. 12 (土)	第7回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加
11. ( )	学部サポーター制による講義	
1. 7 (土)	第3回理事会	年間行事の反省 新年度諸計画について
1. 11 (水)	第2回編集委員会	会報123号 校正
2. 1 (水)	会報123号発行	8,300部
3. 3 (金)	第4回常任理事会	28年度行事活動反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (金)	平成28年度卒業式	卒業生学部生 名 院生 名

平成27年度 決 算 書

平成28年度 予 算 書

(収入の部)

(単位：円)

費 目	本年度予算	本年度収入	増 減	摘 要
1. 会 費	5,000,000	5,020,000	20,000	入学者(235名+15名)@20,000
2. 寄 付	210,000	323,889	113,889	寄付金等
3. 雑 収 入	3,500	3,608	108	利息等
4. 繰 越 金	2,055,009	2,055,009	0	
計	7,268,509	7,402,506	133,997	

(収入の部)

(単位：円)

費 目	本年度予算	前年度予算	増 減	摘 要
1. 会 費	3,880,000	5,000,000	△1,120,000	入学者予定者(170名+24名)@20,000
2. 寄 付	200,000	210,000	△ 10,000	寄附金等
3. 雑 収 入	3,500	3,500	0	利息等
4. 繰 越 金	2,111,068	2,055,009	56,059	
計	6,194,568	7,268,509	△1,073,941	

(支出の部)

費 目	本年度予算	本年度支出	増 減	摘 要
1. 会 議 費	600,000	331,376	268,624	支部長会・理事会
2. 旅 費	650,000	400,880	249,120	支部長会・理事会
3. 印 刷 費	1,300,000	1,166,400	133,600	会報年2回(カラー頁増やす)
4. 通 信 費	450,000	373,060	76,940	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	150,000	150,000	0	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	150,000	10,590	139,410	PC・プリンター機器
8. 消耗品費	200,000	34,634	165,366	封筒、ラベル、コピー代等
9. 支部助成費	500,000	487,700	12,300	
10. 卒業記念費	450,000	431,568	18,432	電波時計付フォトスタンド
11. 国際交流基金	250,000	250,000	0	
12. 支部活動支援費	550,000	506,514	43,486	芸能・文化支援
13. 学部活動支援費	500,000	279,922	220,078	学部サポーター活動支援等
14. 積 立 費	500,000	0	500,000	
15. 雑 費	150,000	68,794	81,206	
16. 予 備 費	68,509	0	68,509	
計	7,268,509	5,291,438	1,977,071	

(支出の部)

費 目	本年度予算	前年度予算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	500,000	600,000	△ 100,000	支部長会・理事会
2. 旅 費	600,000	650,000	△ 50,000	支部長会・理事会
3. 印 刷 費	1,260,000	1,300,000	△ 40,000	会報年2回
4. 通 信 費	410,000	450,000	△ 40,000	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	150,000	150,000	0	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	110,000	150,000	△ 40,000	PC・プリンター機器
8. 消耗品費	150,000	200,000	△ 50,000	封筒、ラベル、コピー代等
9. 支部助成費	500,000	500,000	0	
10. 卒業記念費	450,000	450,000	0	電波時計付フォトスタンド
11. 国際交流基金	250,000	250,000	0	
12. 支部活動支援費	520,000	550,000	△ 30,000	芸能・文化支援
13. 学部活動支援費	250,000	500,000	△ 250,000	学部サポーター活動支援等
14. 積 立 費	0	500,000	△ 500,000	
15. 雑 費	120,000	150,000	△ 30,000	学生アルバイト、事務謝礼等
16. 予 備 費	124,568	68,509	56,059	
計	6,194,568	7,268,509	△1,073,941	

# 平成 28 年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	佐野 栄・奥 定一 孝		監 事	矢野 裕 司		常任幹事	松田 邦 雄
	会 長	高橋 治 郎			相原 孝 裕			
部	副 会 長	立 入 哉	峯 本 高 義	村 上 朋 子	菅 田 顕		山 本 千 鶴 子	
	理 事	山 本 周 三	長 野 照 道	山 下 雅 司	菊 川 國 夫		満 田 泰 三	
		村 上 嘉 一	鎌 田 サチ子	和 田 和 子	阿 部 晋		垂 水 葉 子	
		井 出 節 雄	後 藤 陽 三	田 淵 香 織	丸 山 祐 樹		辻 井 芽 美 子	
		白 石 久 美 子	山 上 千 津	渡 邊 恵 理	菅 洋 二		谷 村 晴 香	
	森 山 由 香 里							

支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	後 藤 宏 治	川之江南中	日 浦 正 文	金生第一小	村 上 圭 司
伊予三島	鈴 木 恵 子	豊 岡 小	高 橋 浩 二	中之庄小	井 川 幸 子	中 之 庄 小
土 居	越 村 愼 治	関 川 小	高 橋 竜 貴	土 居 小	船 田 ゆ り	関 川 小
新居浜	中 野 久	若 宮 小	矢 野 雅 士	泉 川 中	畑 野 一 恵	若 宮 小
西 条	曾我部 研 二	橘 小	吉 岡 健 二	玉 津 小	越 智 恵 里	水 見 小
東予・周桑	磯 明	小 松 幼	青 野 信 樹	神 拝 小		
今 治	高 井 剛	鳥 生 小	高 橋 隆 司	今治市教	瀬 野 美 千 代	波 方 小
今治・越智	橋 本 直 行	伯 方 中	菅 昭 彦	大三島小	田 邊 正 憲	岩 城 小
松山・北条	藤 原 愛 明	粟 井 小	田 中 祐 子	北 条 小		
松 山	矢 野 裕 司	味 生 小	城 本 すみ江	新 玉 小	森 健	勝 山 中
東 温	今 西 俊 介	西 谷 小	八 木 良	川 内 中	藤 原 雅 彦	南 吉 井 小
伊 予	篠 崎 邦 裕	砥 部 中	大 城 博	北 山 崎 小	橋 本 佳 史	由 並 小
上 浮 穴	大久保 秀 司	美 川 小	段 王 繁 嘉	久 万 小	大 高 茂 範	美 川 小
大 洲	小 倉 和 芳	肱 東 中	白 石 清 美	肱 川 小	櫛 部 昭 彦	平 野 中
喜 多	山 田 眞 市	大 瀬 小	清 水 輝 昭	小 田 小	山 下 吉 信	内 子 小
八 幡 浜	二 宮 あさみ	江 戸 岡 小	甲 野 正 人	神 山 小	梶 原 章 代	千 丈 小
西 宇 和	大久保 孝	水ヶ浦小	末 光 礼 子	三 机 小	竹 上 正 也	三 崎 小
西 予	今 崎 津 栄	城 川 小	井 上 健	野 村 中	中 村 真 紀 子	明 浜 小
宇 和 島	川 越 芳 彦	蔭 淵 小	松 廣 歩	九 島 小	片 岡 真 由 美	遊 子 小
北 宇 和	布 博 文	松野南小	酒 井 隆 仁	松野南小	松 本 和 美	近 永 小
南 宇 和	中 川 公 詞	東 海 小	清 水 二十志	城 辺 小	清 水 美 和	船 越 小
附 属	山 上 千 津	附特別支援				

県外支部	東 京	兼 頭 吉 市	山 下 正 洋	森 孝 枝
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪	神 垣 鉄 雄	本 宮 久	杉 山 容 子
	神 戸	木 原 孝 造	平 山 昇	加 登 康 智
	岡 山	神 崎 順 治		

編集委員	菅田 顕	峯本 高義	菊川 國夫	村上 朋子	山下 雅司	松田 邦雄
------	------	-------	-------	-------	-------	-------



## 愛媛大学と山形大学で「第6回卒業・修了合同美術展覧会」を サテライトオフィス東京にて開催しました

### 【展覧会概要】

- 会 場：サテライトオフィス東京（東京都港区芝浦3-3-6キャンパス・イノベーションセンター）
  - 参 加 者：29名（愛媛大学9名、山形大学20名）
  - 開催期間：2016年3月4日（金）～3月7日（月）
- 【スケジュール：3月4日搬入・陳列、ギャラリートーク、交流会／3月8日撤去・搬出】

### 【展覧会の様子】



愛媛大学学生作品



愛媛大学学生作品



愛媛大学学生作品



ギャラリートークの様子



ギャラリートークの様子



ギャラリートークの様子



交流会の様子



受付の様子



山形大学との集合写真

### 【展覧会を終えて】

愛媛大学からは教育学部芸術文化課程造形芸術コース7名と学校教育教員養成課程美術教育専修2名の合計9名の参加がありました。残念ながら6回目となる今回が最終回となってしまいましたが、本展覧会が学生に与えた影響は決して小さなものではありませんでした。作品をつくるという営みは人によって様々なとらえ方・考え方がありますが、少なくとも卒業制作はただつくりあらかわしたりするだけで完結するものではなく、自分以外の他者にみてもらうことで初めて完結するものだと思います。作品を通じた他大学の学生との交流や東京という愛媛以外の場所で自身の作品を展示するというのが、卒業制作を自己満足で終わらせることができないという良い意味でのプレッシャーとなり、制作に取り組む姿勢に表れたことは言うまでもありません。それにとどまらず、教育的な取り組みを対外的に発信できる場があるということは、学生だけでなく我々教員にとっても日々の授業や学生支援の改善等の契機や刺激となりました。とはいうものの、このような展覧会を開催するには運送費をはじめとする多大な費用が発生するだけでなく、会場の設営や広報など学生だけで担えるものではありません。費用の面では同窓会の皆様には多大な理解と支援を頂き、そして愛媛大学サテライトオフィス東京の職員の方々には展覧会を献身的に支えていただきました。このような支えがなければ6年間も本展覧会を開催し続けることができませんでした。美術教育講座の教員ならびに学生一同、心温まるご厚意・ご支援に深く感謝しております。最後になりましたがこの場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。